

2024年度 一般選抜問題
前期A日程 2024年1月20日(土)

選 択 科 目

(数学・基礎理科・物理・化学・生物・日本史・世界史・国語)

| | |
|----------------------|------------|
| 数 学 | 1～6ページ |
| 基礎理科 | 7～30ページ |
| ※2科目選択して1科目の扱いとなります。 | |
| 物 理 | 31～44ページ |
| 化 学 | 45～57ページ |
| 生 物 | 59～75ページ |
| 日 本 史 | 77～86ページ |
| 世 界 史 | 87～99ページ |
| 国 語 | 101～115ページ |

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記の科目から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目を選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**基礎理科**」(赤色)と「**数学・基礎理科以外**」(赤色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。数学以外の科目については、解答する科目を選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合は0点となります。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。「**基礎理科**」の解答用紙は2科目を選択し、科目ごとに決められた解答欄にマークしてください。3科目に解答した場合は0点となります。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い(問1～4)に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

1、2、3、4

ア 卒業の日を迎えてアイカンが入り交じった感情になる。

1

- ① 連敗で最下位にカンラクする。
- ② 事前の準備が何よりカンジンだ。
- ③ 遠方へ旅立つ友人をカンソウする。
- ④ 手間をかけずカンイな包装で済ます。

イ 格差の問題が放置されてフンガイする。

2

- ① 元大統領がダンガイ訴追を受ける。
- ② 不幸なキョウガイに光が差し込む。
- ③ 不景気なので状況が好転するガイゼン性は低い。
- ④ ことさら炎上をおおる風潮にガイタンする。

ウ 過去の過ちを思い出してカイゴの涙を流す。

3

- ① 苦労はカクゴの上でエベレスト登頂を目指す。
- ② 人権ヨウゴ団体の活動について調べる。
- ③ 世話になった恩人のサイゴを看取^{みと}る。
- ④ 曖昧な物言いのせいでゴカイを招いた。

エ 主語と述語がショウオウした文を書く。

4

- ① オウギを極めようと修行に励む。
- ② 京都と東京を新幹線でオウフクする。
- ③ 友人の試合のオウエンに行く。
- ④ 好奇心がオウセイな子ども。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 才色 5 備

① 研 ② 堅 ③ 兼 ④ 間

イ 不俱 6 天

① 堆 ② 戴 ③ 泰 ④ 滞

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 衣食足りて 7 節を知る

イ 自家 8 籠中の物

ウ 9 竹の勢い

① 令 ② 葉 ③ 苦 ④ 葉 ⑤ 貞

⑥ 札 ⑦ 印 ⑧ 油 ⑨ 破

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

10、11、12

ア 『星条旗の聞こえない部屋』などを著し、母語でない日本語で創作を行う作家 10

① ドナルド・キーン ② 小泉八雲 ③ リービ英雄 ④ 楊逸

イ 新思潮派でない作家 11

① 芥川龍之介 ② 菊池寛 ③ 久米正雄 ④ 武者小路実篤

ウ 北原白秋の詩集 12

① 『邪宗門』 ② 『月に吠える』 ③ 『在りし日の歌』 ④ 『天地有情』

2 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えなさい。

音楽が楽しめるためには、曲は既存の一定の形式に従ったものでなければならない。他方でその音楽がありふれた響きにならないためには、一定の逸脱が必要である。しかもその逸脱の方法は、伝統的な逸脱方法からも逸脱していなければならない。ありふれた逸脱の方法では、新奇さが失われるからである。

そこで作曲家は、確立された様式にとどまりつつも、新しい方法で逸脱しようとする。逸脱が大きすぎると、音楽は不快になってしまう。だから作曲家は、逸脱が不快になる直前で、新奇さの追求をやめなければならぬ。しかしその「快適さと不快の境目」がどこにあるかについては、事前には分からない。音楽を鑑賞する側も、その境界をあらかじめ明確にすることはできない。

音楽のなかには、もっぱら穏やかな快適さのみを追求して、新奇性を追求しない「実用音楽」もある。例えば、テレマンの食卓音楽、ヘンデルの水上音楽、モーツァルトの喜遊曲などである。こうした音楽は、度が過ぎて不快になる心配がないように作られている。けれどもシトフスキーが関心を寄せるのは、覚醒的な力を持った音楽である。日常生活を軽く彩る音楽ではなく、人々の感受性や脳の情報処理能力を最大限に刺激するような音楽である。そのような音楽は、伝統的な様式からできるだけ逸脱しようとする。

^A 実用音楽の理想は、人々に「安楽 (comfort)」をもたらすものであるだろう。これに対して、刺激の強い音楽の理想は、安楽を超えて、人々の「快楽 (pleasure)」を最大限に高めるものである。シトフスキーは明確に論じてはいないが、いまこの区別によって安楽と快楽を分けてみると、人はたんなる安楽を求めるのではなく、五感をすべて用いて最大限の快楽を求める存在でもある。その場合の快楽はしかし、最大限の不快と隣り合わせにあり、その境目は明確ではない。人はしばしば快楽の度が過ぎて、最大限の不快にいたりつくことがある。

この安楽と快楽の区別は、例えば、私たちが絵画を鑑賞する際に、「快い」と感じる絵と「興味深い」と感じる絵を識別することにも対応するだろう。シトフスキーは、芸術作品を鑑賞する人々の生理的反応を調べた実験を参照しつつ、穏やかな刺激を与える作品は「快いもの」「安楽」であるのに対して、不安を伴うような興奮の感覚を与える作品は「興味深いもの」「快楽」であると解釈している。安楽としての快は、安心して得られる快である。これに対して逸脱から得られる快楽は、不快のリスクが大きいけれども、脳や五感を最大限に活用して、最大限に得られるものである。

最大限の快楽を得るためにはしかし、脳の能力や五感の感受性を掘り下げていくという、修練の過程を必要としている。人はマニアとして、玄人として、修行者として、あるいは道楽者として、脳や五感を掘り下げることによって、最大限の快楽を得る。ところがその最大限の快楽は、既存の快楽からの逸脱によって得られるものであるから、下手をすると最大限の不快へといたるリスクがある。最大限の快楽とは、逸脱を通じてマニアクに掘り下げた刺激である。その掘り下げ方が凡庸なものであれば、いつでも刺激を失うであろう。またその掘り下げ方に失敗すれば、快楽は不快なものに転化するだろう。いずれにせよ、^B 最大限の快楽を得るためには、逸脱的なものを求めなければならない。

またその快楽を持続させるには、逸脱に次ぐ逸脱を求めなければならない。
ポスト近代の消費社会とは、このような逸脱による快楽を求める社会であった、ということができ
る。しかし新奇さの追求は、限度を超えると不快なものへ転化する。もはや新奇さが快楽を生み
かえって不快の源泉になる場合には、どのようにすればいいのか。シトフスキー自身は、人は安楽と
快楽の自由選択において、合理的に判断できるだろうと考えた。人は快楽が不快に転化するリスクを制

御できると考えた。もしそうだとすれば、次のように言うことができる。C 消費のミニマリズムが生まれる背景には、逸脱的な新奇さがもたらす不快のリスクが上昇したのではないか、そしてそのリスクに対して人々は回避的になってきたのではないかと。

逸脱的な新奇さを追求していくと、それは同時に、不快のリスクを上昇させる。そのようなリスクは、ネット社会における「情報の過剰」とともに高まっているかもしれない。クラップは『過剰と退屈』で、モノや情報が過剰になると、人生はかえって無意味化し、退屈になるというパラドクスを指摘している。

クラップによれば、人間には、興味深いと感じる情報量の「閾値」というものがある。例えば、物事を細部にわたって描写していくと、それは興味を引き付ける点を越えて、しだいに退屈度を高めていくだろう。ヴォルテールがいうように「退屈な人である秘訣は、なにもかも語ること」である。聞き手がうんざりするまで話の細部を積み重ねる人は、他人を退屈させてしまう。あるいはまた、体力的な問題もある。例えば博物館で、私たちは一時間か二時間程度鑑賞すると、疲れてしまう。それ以上に鑑賞しても、興味を持続させられなくなる。人は疲れると、体力や精神の集中力が減退し、それで退屈してしまう。第三に、人はあまりにも多様な経験には喜びを感じないようである。テニスなどのスポーツ競技には、一定のルールがある。もしそのルールが変更されたり、あるいはルールによる縛りが少なくなると、人はスポーツ競技を楽しむことができなくなるだろう。あまりにも X が高いと、人は退屈を感じてしまう。このように、Y がある閾値を超えると、人は意味を受け取ったり、意味を創造したり、意味を解釈したりする営みを劣化させてしまう。情報が増えても、それらを意味として受けとめることができなくなる。

クラップは、情報が凡庸なものへと劣化するプロセスについて、いくつかのパターンをリスト化している。(1)忘れる、慣習化する、といった心理的なプロセス。(2)情報が繰り返されるなかで、その細部が失われてしまう場合。例えば、何度もコピーされて伝承された噂話や、ある本物の安価な複製(キッシュ)は、凡庸なものとなる。(3)機械的に大量生産されたもの。それらは単調に感じられる。(4)ポピュラー文化のように画一的に拡散されるもの。それらは凡庸に感じられる。(5)模倣されたファッションも、凡庸に感じられる。(6)情報を親しいグループもしくはネットワークに限定してしまうと、凡庸化してしまう。(7)自然な／現実的な／正統なといった、文化的な意味の基準を当てはめることで排除されたものは、否定的な意味を受け取るが、文化的意味の基準が多すぎると、意味を否定されるものも多くなる。(8)意味の欠如は退屈をもたらす。しかしその退屈を紛らわせてくれるような、慰安となるエンターテイメントがある。テレビのバラエティ番組などは、意味の欠如を代償してくれる(クラップはこれを「社会的ブラシーボ(偽薬)」と呼んでいる)。

こうした D 意味の凡庸化とその代償物の享受から免れるためには、次のような実践が効果的であるかもしれない。慣習化した行動をすべてやめる。高価なホンモノを志向する。大量生産されたものを買わない。画一的なポピュラー文化に近づかない。ファッションは最低限にする。情報はできるだけオープンにする。既存の文化的意味の基準によつて物事を排除しない(差異のコードを否定する)。無意味な生を癒してくれる偽薬(慰安的娯楽)には近寄らない、等々である。こうした実践は、一方ではハイカルチャー(上位文化)を肯定し、他方ではミニマリズムに接近するだろう。ミニマリズムは、情報の凡庸化を克服するための、一つの手段になりうるかもしれない。

(橋本努『消費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神』による)

なお、本文中に一部省略したところがある。()

(注) 閾値— 限界値。ある反応を起すのに必要となる値の水準。

問1

傍線部A「実用音楽の理想は、人々に『安楽 (comfort)』をもたらすものであるだろう。これに対して、刺激の強い音楽の理想は、安楽を超えて、人々の『快楽 (pleasure)』を最大限に高めるものである。」とあるが、「実用音楽」と「刺激の強い音楽」について説明したものと最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

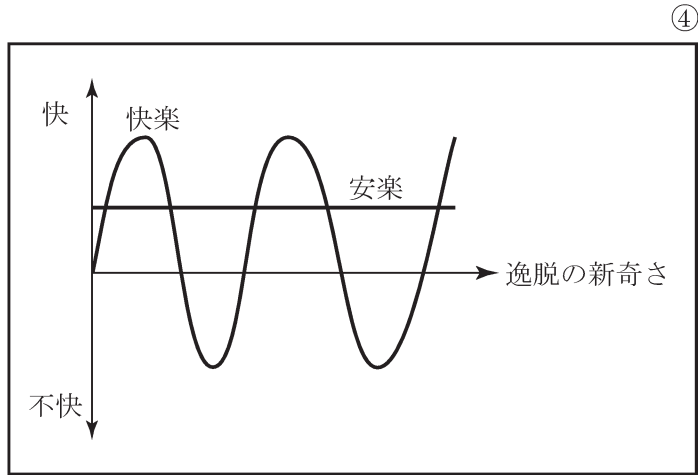
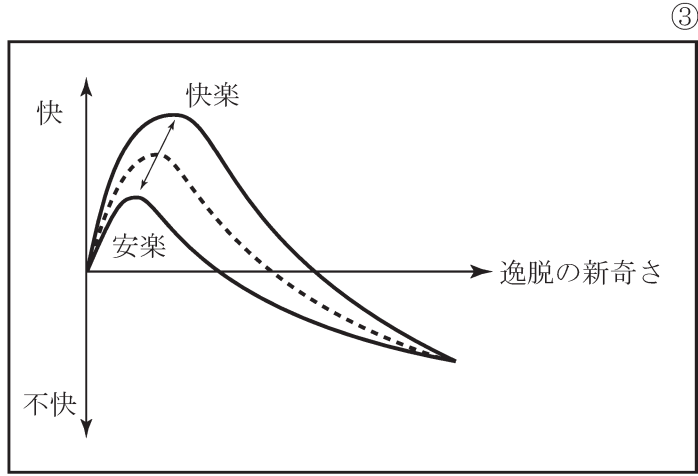
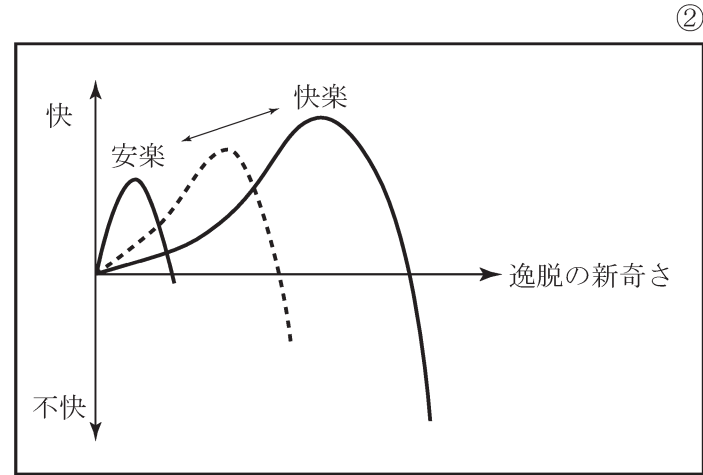
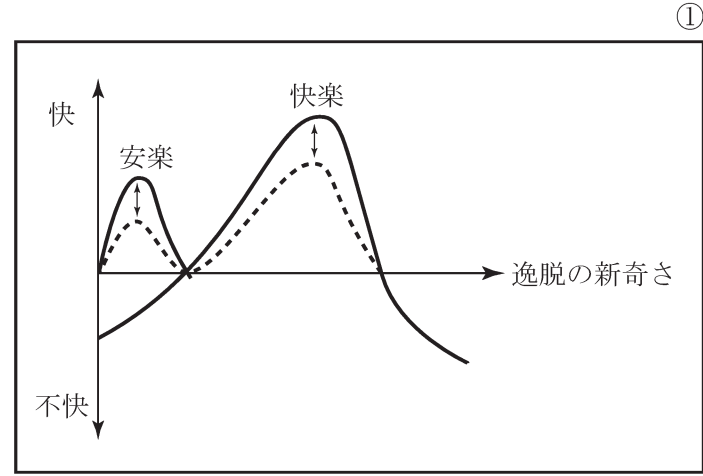
13

- ① 「実用音楽」は既存の形式を守ることによって快適さをもたらそうとするものだが、「刺激の強い音楽」はまったく新しい形式で人々の欲求を解放することを試みるものである。
- ② 「実用音楽」は万人が心地よく感じることに主眼を置くものだが、「刺激の強い音楽」は一部の人が不快に感じるとしても個の最大限の快楽を追求するものである。
- ③ 「実用音楽」は不安を与えないことを重視するものだが、「刺激の強い音楽」は不快と感じる寸前まで様式を逸脱することで生じる快楽を重視するものである。
- ④ 「実用音楽」は聴いている人を不快にさせない程度の新奇性を目指すものだが、「刺激の強い音楽」は人々を覚醒させるような究極の新奇性を求めるものである。
- ⑤ 「実用音楽」は鑑賞者が快適さを感じることを保証されたものだが、「刺激の強い音楽」は鑑賞者にとって聴く前に快・不快が判断しづらいものである。

問2

傍線部B「最大の快樂を得るためには、逸脱的なものを求めなければならぬ。またその快樂を持続させるには、逸脱に次ぐ逸脱を求めなければならない。」とあるが、この内容に関連して、安樂と快樂を区別したうえで、逸脱と快／不快の關係について示した(図)として最も適當なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14



図表中の ----- は途中の段階を表す。

問3

傍線部C「消費のミニマリズムが生まれる背景には、逸脱的な新奇さがもたらす不快のリスクが上昇したのではないか、そしてそのリスクに対して人々は回避的になってきたのではないか」とあるが、ここで筆者は何を言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

15

① あらゆるものを自由に選択して消費できる社会になったことで、人々は消費から得られる刺激を求めることよりも、刺激を求めることで生じる経済的なリスクを避けるようになったということ。

② 過剰な新奇さが追求されるといふ社会的な変化によって、人々は目新しいものから受ける刺激を感じにくくなり、不快を感じるリスクを負ってまで目新しさや新奇性を求める意味を見失ったということ。

③ 過剰な新奇性に対して拒否反応を示す消費者の声が大きくなり、その声に危機感を持った生産者側が奇抜な商品避けて商品を作らなくなったことで生産が縮小し、それに伴い消費も縮小していったということ。

④ 逸脱による快楽を求める社会では、逸脱の新奇さが過剰になって消費者が不快を感じる場面が増えたため、人々が過剰な刺激を避けようと自身にとって快適な消費の仕方を理性的に判断するようになったということ。

⑤ 生産者が人々に感動を与えようと、こぞって逸脱的な奇抜さを追い求めたことで逸脱の形式が飽和状態となった結果、商品がかえって凡庸化し、量産されていく新奇さのない商品に消費者が次第に飽き始めたということ。

問4

空欄 X ・ Y に入る表現の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- | | | | | |
|---|---|-----|---|---------|
| ① | X | 完成度 | Y | 普遍性や安定性 |
| ② | X | 自由度 | Y | 多様性や複雑性 |
| ③ | X | 満足度 | Y | 公共性や規範性 |
| ④ | X | 許容度 | Y | 規則性や画一性 |
| ⑤ | X | 期待度 | Y | 娯楽性や遊興性 |

問5 傍線部D「意味の凡庸化」とあるが、その具体例として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 17

- ① 一流ブランドの流行にデザインを似せた同型の安価な服が各メーカーで量産される。
- ② ある曲が大ヒットした後、どの音楽番組でもその曲ばかりが取り上げられる。
- ③ 有名な画家の代表作とされる絵が印刷された商品が大量に生産される。
- ④ 新進気鋭のピアニストによるコンサートが母国以外の会場でも開催される。
- ⑤ 一個人のSNSでのコメントが取り上げられて、コメントの一部が拡散されていく。

問6 高校生五人が本文を読んで話し合った。本文の内容を踏まえた発言として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。 18、19

- ① 生徒A…筆者は、ポピュラーな文化を庶民的なものであるとして否定的な見解を示しているね。高級志向のハイカルチャーは確かに素晴らしいけれど、皆がそれを楽しむことができるわけではないし、バラエティ番組などにもとても面白いものがあるのに。
- ② 生徒B…文化が画的に拡散されることによって、物事の意味が劣化していくと考えているようだね。大量生産や安価な複製がもたらす凡庸性について述べているのであって、人気のあるものをすべて否定してはいないんじゃないかな。
- ③ 生徒C…上位文化は大衆的な文化と対置されるけれど、優劣を比較しているというより、上位文化が意味の凡庸化に対して持つ力に着目しているんだと思う。情報があふれて意味が凡庸化する社会だからこそ、本物を見極めることが大事なんだね。
- ④ 生徒D…それまでとは一線を画す新奇性があれば、文化としての意味が認められるということだね。心の慰安となるエンターテインメントは退屈を一時的に埋めてはくれるけど、「偽薬」、つまり意味の欠如を根本から解決するものではないんだね。
- ⑤ 生徒E…私もインターネットのニュースサイトや新聞で、時事問題などの記事を読んでみると難しく複雑すぎてうんざりしてしまうことがあるんだけど、筆者の言うように情報の過剰さに退屈を感じているということなのかもしれないな。

3 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

淳之祐は幼い頃に高橋宋庵と佳枝夫婦のもとに養子として引き取られた。高橋家は代々医者の家系で、淳之祐自身も医者になったが、幕府が設置した小石川養生所に勤めだしてからほとんど家に帰っておらず、義兄の基則に本を返すために久しぶりに高橋家を訪れた。淳之祐は久しぶりに会った佳枝の瘦せた様子に驚きつつ、縁側で基則が来るのを待っていた。

高橋の家の者は、養子の淳之祐に優しくかった。辛い思いをしたことはない。歳の離れた義兄の基則はなんでも教えてくれ、淳之祐につきあつて石けりや凧揚げ、剣術の稽古の相手をしてくれたこともあつた。しかし、喧嘩をしたことはない。ぶつかったことは一度もなかった。基則はいつも話のわかる義兄だつた。

淳之祐にはそれが寂しかった。

△そう感じたのは贅沢だつたのだと今では思えるが、当時は桜の木の下でいつまでも膝を抱えて座り地面に絵を描いて遊んでいた。

桜は関山という種類の古木で幹が太い。

淳之祐は中庭に降り、桜の黒い木肌に触れてみた。ざらついた感触は昔のままである。満開の頃は、ここに座つて飽きもせず見上げていたこともあつた。

弓なりに曲がつた枝いっぱいには大ぶりの花を付ける関山は、圧倒されるくらい美しい八重桜だつた。散り際にまた一段と綺麗だつた。花びらが雪のように次から次へと舞い落ち、吹く風が淡い桜色に染まり自分を包んでいるような気がした。

目を閉じると暖かい陽を浴びていた感覚までも甦^{よみがえ}つてくる。

あのとき、広縁に佳枝が座つていた。一度や二度ではない。目についたら立ち止^{とど}まり気にかけてくれた。

穏やかに「淳之祐さん、綺麗ですね」と一緒に眺めてくれたのを思い出した。艶やかな髪をきちんと結び柔らかな頬に笑みを浮かべていた。膝の上でゆったりと組まれた指先は白魚のようになめらかで美しかった。その手を差し伸べ「いらつしゃい」と声をかけてくれたのに淳之祐は足を送ることもできなかった。

どう甘えればいいのかわからず、頑^こなな子どもだつたと思う。

そんな淳之祐を佳枝は受け入れ、見守つてくれていたのだろう。

「まだ咲きませんよ」

a 「子ども声に我に返つた。

広縁に幼い姪^{めい}が立っていた。

「もう少ししたら咲くつて、お祖母様が教えてくれました」

「楽しみだね」

淳之祐が歩み寄ると姪は後ずさつた。

ついこの前まで赤ん坊だと思つていたが、もうこんな口をきくようになったのかと驚いた。

「いくつになつたのかな」

「四つ」

「そうか、大きくなつたね」

淳之祐が傍らに腰をかけると、奥から甥^{ねい}の隆俊^{たかとし}が慌ててやってきた。

「こつちにおいで。叔父上は御用があるのだから」

淳之祐に向き直り、「いらつしやいませ」と挨拶した。隆俊は八つだった。
「ずいぶんしつかりしたものだ」

淳之祐が感心していると、宋庵が広縁に現れた。

「待たせたな、淳之祐」

「父上」

義兄に写本を返すつもりだったが、宋庵が出てきたので驚いた。宋庵は二人の孫に「下がっていない」と静かに言った。隆俊が妹を連れていった。

「ようやく来てくれたな」

宋庵は笑みを浮かべた。

「兄上の写本をお返しに来ました」

「それでもしないと、おまえはいっこうに来てくれない」

「^Bでは、兄上は……」

「私が頼んだことだが、基則は本心からおまえに貸してやりたかったそうだ。どうだ、役に立ったか」

「それはもう。前々から筆写したかったものなので」

淳之祐は風呂敷包みを解いて、写本を差し出した。

「うちに帰ってくれば、おまえが読みたい本もたくさんあるだろうし、うちから医学館に通えば今の何倍も勉強できるぞ」

「それは、そうですか」

淳之祐は返事に困った。

「淳之祐と話す機会がほしくてな」

宋庵は行灯を心持ち引き寄せた。

明りに照らされた養父は少し歳を取ってみえた。引き締まった表情は変わらないが、白髪が増え皺が深くなっている。^b 違い棚に宋庵の影が映り、微かに揺れていた。

「まだ養生所にいるつもりなのか」

「はい」

^c 淳之祐は迷いなく答えた。

宋庵は「やはりそうか」と呟いた。

「養生所で経験を積むのも修業だと思い、おまえの望むままに出したのだが」

養父や義兄が養生所に長くいるのは望んでいないだろうと淳之祐も察していた。それもあって、家に足が向かなくなっていた。

「いつまで養生所にいるつもりだ。^{注1} 肝煎もおられるのだから、淳之祐がいなくてもいいのではないか。責任のある立場ではなかるうに」

養生所には設立以来、小川笙船の子孫が起居している。

「このまま残って^{注2} 御番医を目指しているのか」

「御番医ですか……」

考えたこともなかった。

津留川ならともかく、自分にはそのつもりはないと淳之祐は首を振る。

「うちに戻って、基則と一緒にやってくれてもいい」

そう思わないでもなかったが、義兄には隆俊という跡取りがいる。自分が戻ったところで家の役に立つとは思えない。

「うちで引き取ったときはまだ五歳だったか」

宋庵は懐かしそうだった。

「ここまでよく努力したものだ」

「父上や兄上のお陰です」

淳之祐は素直に頭を下げた。

「結木の家を再興してもいいのだぞ」

宋庵の言葉に淳之祐は顔を上げた。

父が詰め腹を切らされ、家は断絶した。姉の那歌は十五のときに歳の離れた下級武士の後添えに出された。淳之祐が幼い頃は何度か高橋の家を訪ねてくれたが、もう何年も会っていない。女兒が一人生まれ、その子はもう姉が嫁いだ年齢好になっていくはずだ。姉は今も番町に住んでいる。

「姓だけでも戻してもいいのではないか。亡くなった御両親も望んでおられるだろう」

宋庵に勧められたが、淳之祐は押し黙っていた。

「おまえが立派に医者として歩み始め、私は自分の役目は果たしたと思っている。なんの^①気兼ねもいらぬのだ。高橋の次男のままにいるのなら、それはそれでもちろん嬉しい」

淳之祐は宋庵の気持ちがあったかった。

「今はただ、勉強を続けたいとそれだけを望んでいます」

「そうか。私の考えを話したままで。一度は言っておこうと思っていたのでな。追々に考えていけばよい」

宋庵はどこか落ち着かない様子だった。淳之祐もなぜ宋庵が今そのようなことを切り出したのか^②腑に落ちず、返事のしようがなく気まずくなる。

「たまには顔を出しなさい。佳枝も会いたがっている」

「母上ですか」

宋庵は頷き、視線を落とした。

「おまえも気づいたであろう」

淳之祐は思わず驚きの声を上げそうになった。

「あと半年か三月かというところだろう。胃の腑の上のあたりに腫瘍があつてな。吐き気と痛みは薬でなんとか押えているが、ものが食べられない。本人が床につくの嫌がるので普段通りに過ごさせているが、それもいつまでもつか」

宋庵は絞り出すように話した。

「母上は、そのことは」

「話してはいない。しかし、察しているのかもしれない。薬で治るといふ私と基則の言葉を信じているふりをしているようだ」

明るく振舞っていた母の姿が胸に迫ってくる。

「だからと言って、今すぐおまえの身の振り方を決めて佳枝に報告してほしいのではない。あれもおまえのことを心配しているだろうから、機会があれば安心させてやってくれればと思つてな」

「わかりました。父上の仰る通りだと思います。しかし、今すぐは決めかねます」

淳之祐はありのままを話した。

「それはそうだろうな」

「顔を出すようにします。でも、急に頻繁にというのは、かえって母上がお辛い思いをするかもしれません」

「また写本を貸そう。おまえの好きな関山ももうすぐ咲く。佳枝と一緒に眺めてはどうだ」

宋庵は中庭を眺め、桜が見えているかのように目を細めた。

「父上は覚えておられるのですか」

「覚えているとも。時々、一人になりたがって、関山の根元で一日中でも座り込んでいた。すなおな良い子であったから、その分、我儘を言いたかったり寂しかったりするのを我慢していたのかもしれない。佳枝がそんなおまえを心配して、よく見ていたな」

宋庵は懐かしそうに語った。

そして、その様子を養父は見守ってくれていたのかと淳之祐は胸が熱くなった。

血の繋がりはなくても親子であり、家族なのだと改めて感じ、淳之祐は今は闇に佇む関山に目を移した。

(安住洋子『春告げ坂 小石川診療記』による。)

(注) 1 肝煎——養生所の代表のこと。

2 御番医——江戸幕府において若年寄(幕府の重役)の配下に属し、殿中で体調不良者の診療にあたった医師。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 20、21、22

- (ア) 頑なな
- 20
- ① 物静かな
② 扱うのが大変な
③ 立場をわきまえた
④ 片意地を張った
⑤ 恥ずかしがりやの

- (イ) 気兼ね
- 21
- ① 迷い
② 遠慮
③ 不安
④ 同情
⑤ 謙遜

- (ウ) 腑に落ちず
- 22
- ① 共感できず
② 心が落ち着かず
③ 納得できず
④ 許すことができず
⑤ 見当もつかず

問2 傍線部A「そう感じたのは贅沢だったのだと今では思えるが、当時は桜の木の下でいつまでも膝を抱えて座り地面に絵を描いて遊んでいた。」とあるが、当時を振り返っている淳之祐の様子を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 23

- ① 誠実に向き合ってくれる義兄をもった自分は、いかに恵まれていたかに気づくことができ、月日の流れと自身の成長を感じて感慨深く思っている。
- ② 高橋家と疎遠になってしまった今になって思うと、親しく接してくれた義兄にもっと素直に甘えればよかったと、感傷的な気持ちになっている。
- ③ いつも優しく接してくれる義兄に感謝するよりも、その態度にかえって距離を感じて孤独感を抱いていた幼い頃の自分を懐かしく思い返している。
- ④ 義兄は思いやりのある素晴らしい人物であったにもかかわらず、その完璧さに反発していた昔の自分の身勝手さを恥ずかしく思っている。
- ⑤ 義兄の優しさに甘え、自分の気持ちを伝えてぶつかり合うことができなかった当時の自分に対して、我儘であったと気がとがめている。

問3

傍線部B「では、兄上は……」とあるが、このときの淳之祐の心情を説明した最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① 写本を返すという名目だったものの、本当は義兄に会いたい気持ちが強かったため、自分に会いたがっていたのは養父だったとわかって、残念に思っている。
- ② 義兄が写本を貸してくれたのは、自分を家に来させるために養父が命じたことだったのだと気づき、養父の真意を測りかねて不審に思っている。
- ③ 写本を返すために気がすすまないうちにも家に来てみたところ、養父が画策して家に来るように仕向けていたのだとわかり、だまされたことに傷ついている。
- ④ 家に寄り付かない自分のために貴重な写本を貸してくれたうえに、今日は自分と養父に気を遣って家を留守にしているのであろう義兄に申し訳なさを感じている。
- ⑤ 義兄が大切な写本を貸してくれたのは、自分を家に来させるための理由づけであったのだと今初めて思い至り、驚きとともに戸惑いを感じている。

問4

傍線部C「宋庵はどこか落ち着かない様子だった。」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

25

- ① 病気の佳枝を安心させるためにも淳之祐に将来の指針を示してやりたかったが、急な提案に戸惑う淳之祐の心中を察して、自分の気持ちを押しつけてしまったことを反省し、父としてふがいなく思っているから。
- ② 佳枝の病状のことを口にせずにはいたが、その話題に触れないままでは佳枝を安心させてやってほしいという自分の真意が淳之祐に伝わらないため、いよいよ話を切りださなくてはならないと感じているから。
- ③ 明るく振る舞う佳枝の思いを汲んで病気のことは伏せておくつもりでいたが、淳之祐が家に戻る気がないことを悟り、佳枝のためにどうにかうまく淳之祐を説得できないだろうかと考えを巡らせているから。
- ④ 淳之祐なら自分がこうして家に呼び寄せた裏には別の事情があると気づいてくれるだろうと思っていたが、一向に察する様子がないのでどのように対応してよいかわからず、気持ちが焦り始めたから。
- ⑤ 佳枝のためにも淳之祐には家に戻ってほしいと考えていたが、養生所で勉学を続けたいという意志の固さを知り、息子の成長を感じつつも、家族より勉学を優先する姿に悲しみを抑えられなかったから。

問5 波線部 a～e の内容や表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

26

- ① a 「子どもの声に我に返った」は、少年期の回想にひたっていた淳之祐が子どもに話しかけられて現実に戻った様子を表しており、孤独で内気だった自分と全く物怖じしない義兄の子との対比を通して、その無邪気さをまぶしく思う心理描写を導いている。
- ② b 「違い棚に宋庵の影が映り、微かに揺れていた」は、淳之祐と長く顔を合わせていないうちに年老いた養父が、淳之祐の将来の見通しが見つからないままに、病で妻の先が知れない状態であることに對して不安を抱えている様子を暗示している。
- ③ c 「淳之祐は迷いなく答えた」には、淳之祐がこれからも養生所にいるということ望んでいないであろう養父の問いかけに對して、たとえ望まれなかったとしても、高橋家における自分自身の立場を考えて意志を貫こうという淳之祐の思いの強さが表れている。
- ④ d 「宋庵は絞り出すように話した」は、余命いくばくもなく食事もままならないなか、懸命にいつもと変わらない様子で振る舞おうとする佳枝のことを考えると悲しみが込み上げ、やつとの思いで淳之祐に病状を伝える宋庵の様子を描いている。
- ⑤ e 「桜が見えているかのよう目に細めた」は、子どもの頃の淳之祐と、それを見守る佳枝の様子を大切なものとして思い浮かべている宋庵の心情を表現しており、今年もその花のそばでかけがえのない家族の時間をもつてほしいと願っていることがうかがえる。

問6 この文章で描かれている家族に對する淳之祐の心情を説明したものととして最も**適当なもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

27

- ① 養子であることを理由に高橋家から足が遠のいていたが、少年期の桜の話を通して、自分が医者として歩み始めたことを佳枝だけでなく宋庵も認めてくれたとわかり、自分やはり高橋家の人間なのだという実感を強めている。
- ② 桜の木を通して少年期を思い出すとともに、久しぶりに会った佳枝の病や心労を重ねたのであろう宋庵の老いを目の当たりにし、自分を大切に思ってくれていた二人に對する自身のこれまでの不義理な対応に胸を痛めている。
- ③ 家を訪れない間に成長した義兄の息子の姿や年老いた父母の様子に時間の経過を感じて、昔から変わらない桜が過去も今も家族を結びつける唯一の存在のように思え、そのほかない美しさに家族の思い出を重ねて胸を打たれている。
- ④ 寂しさをまぎらわすように桜の木の下で過ごしていた少年期の自分を、近くで寄り添おうとしていた佳枝だけでなく、宋庵もまた気にかけて理解してくれていたことを知り、家族のつながりというあたたかさに感極まっている。
- ⑤ 桜の話題をきっかけに、基則や佳枝に甘えることができずにいた少年期の自分を氣遣ってくれる宋庵の思いを聞いたことで、やつと家族の絆を実感でき、当時の辛さが消えていくように感じて、心が晴れやかになっている。